

## 京都大学生存圏研究所創立 10 周年記念式典 祝辞

京都大学生存圏研究所が創立 10 周年という節目の年を迎えるに当たって、祝辞を述べる機会を与えていただきありがとうございます。

津田敏隆所長をはじめとする研究所の皆様、松本紘総長をはじめ京都大学の皆様、共同利用・共同研究拠点としての研究所の活動に参加されてこられた国内外の研究者の皆様、さらに共同利用研究機関を支えてこられた文部科学省のご努力に、この機会に改めて敬意を表すとともに、日本学術会議を代表してお祝いを申し上げます。

日本学術会議は、我が国の人文・社会科学、生命科学、理学・工学の全分野にわたる科学者を代表する機関であり、政府に対する政策提言、国際的な活動、科学者間ネットワークの構築、科学の役割についての啓発活動などを行っています。専門分野という点では、日本学術会議には 30 の分野別委員会があり、それぞれの専門分野の問題を審議しています。一方で、分野横断的な学術問題、あるいは、社会の求めに応じて論ずることが求められる課題など、多角的な問題に学術の観点から考え方を示すという観点から活動することも重視してきました。

私は、生存圏研究所は、学術に求められるこうした既存の専門分野にとらわれない、学際的な役割を体現した組織であると感じます。生存圏科学という大きな柱を立てて、「環境計測・地球再生」、「太陽エネルギー変換・利用」、「宇宙環境・利用」及び「循環型資源・材料開発」という 4 つのミッションに関わる研究を深化させておられるわけですが、それらの研究活動は、多岐にわたりながらも、横断的に結びついています。生存圏研究所の活動は既存の学問分野のどれか一つに収まるものではなく、広くさまざまな学問領域に学際的に展開しています。こういった分野横断的な学問体系や研究手法をそれとして位置づけ、発展させていくことが、新たな学術の地平を切り開いていく上で引き続き重要な活動であると認識しています。

さて、皆様もご存知のように、日本学術会議の科学者委員会では

学術の大型研究計画を検討するための分科会のもとで、大型研究計画のマスタープランを作成してきました。去る3月にも、「マスタープラン2014」を策定したところです。その中では、諸観点から特に速やかに実施すべき「重点大型研究計画」を27件選定しており、その中の一つとして生存圏研究所を中心に、国立極地研究所や名古屋大学太陽地球環境研究所とが実施機関として提案した「太陽地球系結合過程の研究基盤形成」が選定されたことはまことに喜ばしいことです。

生存圏研究所ではMUレーダーや赤道レーダー、あるいは遺伝子組換え植物対応型の大型温室やマイクロ波エネルギー伝送のための大型実験装置を共同利用・共同研究に利用する形で研究活動を進めておられますが、この中にさらに新たな観測装置が組み込まれることで、拠点活動が充実したものになることを期待しております。

学術会議の活動にこれまで以上にご協力いただくとともに、生存圏研究所の一層の発展を祈念しまして祝辞とさせていただきます。10周年おめでとうございます。

2014年6月6日  
日本学術会議会長 大西 隆